

ユーザーレポート User Report

ゼロ
0の証明

お酒を、選んだ父。77歳の生きざま。お父さん、カッコよかったよ!

個人

～病気よりも、家族よりも、お酒が好きだった男性と、それでも諦めなかった家族3年半～

ご利用機器

カメラ付き
アルコールインターロック装置

ALC-ZERO II



中国地方の静かな田舎町で、ひとりの男性が77歳の生涯を閉じました。40代から肝臓がんを患い、手術を2度経験し、脳出血を乗り越え、医師に繰り返しお酒を止めるよう言われ続けても…お酒だけは、最後の最後まで手放しませんでした。定年退職の日、男性が最初にしたことは、退職金で大型の4WDを買うことでした。そして友人たちと、全国をぐるりと3～4ヶ月かけてドライブ旅行へ。奥さんにも娘さんにも行き先すら満足に告げないまま、颯爽と走り去っていったといいます。

「父は、とにかく自由な人でした。おしゃれで、豪快で、自分の好きなことには一切妥協しない。だから、お酒もやめなかった。いえ、正確には『やめられなかった』のではなく、自分の美学として『やめなかった』んです。それが父の生き様でした。」(娘さん)

そんなお父様の晩年、家族がずっと恐れていたのはひとつのことでした。飲酒運転による事故です。コンビニまでのたった数百メートル——その道のりに、家族の心は何年もの間、張り詰め続けていました。アルコールインターロックを取り付けた3年半は、その恐怖から家族を解放した時間でした。そしてお父様は、大好きなビールを枕元に置いたまま、静かに旅立っていきました。

ご家族のご紹介

当事者: Aさん(仮名) 享年77歳、中国地方の田舎町在住
ご家族: 奥様(医療系のお仕事)、娘さん(インタビューにご協力頂いた方)
ご利用期間: 約3年半
ご利用の背景: 長年のアルコール依存、肝臓がん手術歴2回、脳出血後の飲酒運転リスク

豪快で、おしゃれで、どこまでも自由だった男

Aさんは、根っからの自由人でした。背筋が伸びていて、服装にこだわりがあり、仲間と飲む時はいつも場の中心にいた。娘さんも子ども心に、「なんかカッコいいな」と思っていたといいます。不自由なことが何より嫌いで、自分のペースを誰にも乱されたい——そんな人でした。だからこそ、娘さんはインターロックを取り付けた後に、父親に車を返す瞬間を恐れていました。「素直に受け入れてくれるとはとても思えなかった」と言います。あれだけ自由を愛した父が、車という自由を制限される装置を、果たして黙って受け入れてくれるのか——引き渡すまでの間、どうやって返そうか、何度も何度も考えたといいます。そんなAさんに、40代のころ、肝臓がんが発覚します。手術を経て回復

するも、お酒はやめませんでした。50代で再発し、2度目の手術。それでもやめませんでした。60代後半には脳出血で倒れ、飲み屋の席で突然意識を失い、家族が救急搬送。後遺症こそ軽かったものの、「食べ物の好みが変わった」「外に出るのが面倒になった」と、それまでの豪快さの一部が静かに失われていきました。

「脳出血の前は、本当に外でワーって飲み歩いて、酔っぱらって帰ってきたこともあって。それがまあ父らしかった。でも病気してからは、家でゴロゴロするのが好きになって。お酒だけは変わらなかったけど。」(娘さん)

晩年のAさんの行動範囲は、ほとんど家の中になっていました。それでも、唯一ひとりで車を出す目的がありました。近所のコンビニへ、ビールとタバコを買いに行くこと——それだけが、彼に残った「自由」でした。

「あんなに不自由を嫌う父が、インターロックという『不自由』を受け入れてくれたのが、今でも一番の驚きなんです。」(娘さん)

警察も、「対応できない」 病院も、「無理ですね」と言った

娘さんとお母様が抱えていた恐怖は、現実的なものでした。Aさんが屋間からビールを飲み、車のキーを手にするたびに、「もし、誰かを轢いてしまったら」という想像が頭をよぎりました。

「田舎って、車道と歩道の区別がほとんどないような細い道が多いんです。田んぼのあぜ道みたいな道を通らなないと大きな道に出られない。そこを飲んで走って、人を轢いたら、もう終わりじゃないですか。飲酒で人を轢いたら100%こっちが悪いし、その前に止めなければって、それだけを考えてました。」(娘さん)

娘さんはまず、警察に電話しました。「父が飲酒運転をします。捕まえてください」と。答えは「現行犯でないに対応できない」でした。次に、アルコール依存症の専門病院に連絡しました。「強制的に入院させることはできますか」と。答えは「本人の同意がなければ無理」でした。

「病院もダメ、警察もダメ。もう本当にどうしたらいいかわからなくて。そこまで追い詰められて、もうとにかくなんでもいい、お酒を飲んだら車のエンジンがかからなくなるものはないか、ってネットで検索したんです。」(娘さん)

検索の末に見つけたのが、アルコールインターロックでした。しかし娘さんは、すぐには連絡できませんでした。「困っている人を狙う詐欺だったら」という不安が拭えなかったからです。行政の許認可を得た企業であることをホームページの隅々まで確認し、家族や職場の同僚にも相談し——それでも1週間、迷い続けました。

「警察にも病院にも断られた後で、正直これが一番勇気がいりました。安くないお金だったし、騙されてもいいかっていう金額より高かった。でもそれでも、やるしかなかった。」(娘さん)

ユーザーレポート User Report

ゼロ
0の証明

個人

取り付けの日、父はすぐに車で出かけた

取り付けは、Aさんには事前に知らせませんでした。「車屋さんから帰ってきた」という体で自然に対面し、東海電子のスタッフが直接、Aさんに装置の使い方を説明しました。そしてスタッフが帰るやいなや… Aさんはすぐに車に乗り込みました。

「まさかそんなにすぐ乗るとは思ってなかったんですよ(笑)。車が1ヶ月隠されてたから、お酒も買えなかったんでしょうね。やっと戻ってきた車に乗って、コンビニにビールを買いに行った。そのとき素面だったからエンジンはちゃんとかかった。自分で乗って、自分で動くのを確かめて帰ってきた。これが本当に良かったんだと思います。」(娘さん)

娘さんが初めてその場面を目撃したのは、お父様がお酒を飲んだ後に車に乗ろうとした瞬間でした。測定してもエンジンがかからない。お父様はそれを確かめると、何も言わず、静かに車を降りて家へ戻って行きました。大きな声も、機械への八つ当たりも、何もありませんでした。「出かけないの?」と声をかけると、手をひらりと振って「止め止め」とひと言。まるで最初から乗るつもりなどなかったかのように。娘さんは思わず拍子抜けしたといいます。

「飲んだのは自分が一番わかってるから、かからないのは当然やなって思ったんだと思います。自分で納得してくれてた。最初に素面で動くのを確認してたから、壊れてると思わなかった。あの偶然的な流れが、本当に良かった。」(娘さん)



「お酒の缶を見ても、何も思わなくなった」

インターロックを取り付けてから、家族の日常が変わりました。Aさんは枕元に常温ビールを隠し、氷だけを入れて飲むのが習慣でした。部屋の隅に積まれた空き缶、車のシートに放り込まれたゴミ袋——以前は、そのひとつひとつが「また飲んで運転するかもしれない」という恐怖につながっていました。娘さんとお母様は仕事でも気が気でなく、Aさんからの電話が鳴るたびに、何か起きたのではと身構えていたといいます。

「つけてからは、お酒の痕跡を見ても何も思わなくなりました。車に乗れないから。いくらでも飲んでいいよ、って気持ちになれた。それがどれだけ大きかったか。ずっと肩に乗ってた重いものが、スッと降りたみたいな感じでした。」(娘さん)

晩年、Aさんは外出をほとんどしなくなっていました。娘さんとお母様は、毎日こっそりビールとノンアルコールビールを数本ずつ置いておくようにしました。飲みたいだけ飲んでいい。車さえ乗らなければ。それがこの家族の、静かな「最後の折り合い」でした。

※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。

「70歳過ぎたら、もうお酒飲むとは言えないじゃないですか。でも車に乗るから、ずっと口うるさく言い続けなきゃいけなかった。インターロックをつけてからは、飲んでも別にいい、好きに思えるようになった。それが言えるようになったのは、本当にあれのおかげです。」(娘さん)



お酒を隠していた場所

氷を入れたビールが、枕元にあった

Aさんが旅立たれたのは、今年の春のことでした。77歳でした。前日まで自分でお風呂に入り、翌朝は届いた荷物を受け取って冷蔵庫にしまっていました。娘さんが「買い物行ってくるね」と声をかけると、「おう、行ってこい」といつものように返事がありました。娘さんが帰宅すると——Aさんは、もう息をしていませんでした。枕元には、氷を入れたビールが置かれていました。常温のままでは飲まない、それがAさんのこだわりでした。最期の朝も変わらず、自分でビールに氷を入れ、飲んでいたのでしょ。

「病気を治すより、大好きなお酒を選んだ人なんです。肺が悪いのに酸素吸入も断って、タバコも吸い続けた。しんどくても枕元にビールを置いて。でも……それが父だから。怒れなかった。」(娘さん)

40代から「60歳まで生きられない」と言われてきたAさんは、5年刻みで自分の「命の期限」を延ばし続け、結果として娘さんの予想より10年以上長く生きました。喜寿のお祝いに家族で撮った写真の中のAさんは、とびきりおしゃれな表情で笑っていたといいます。

「わしゃ死ぬんじやって言いながら、でも本人は長生きしたかったと思います。60歳で死ぬって言ってたのが5年ずつ延びていった。私の予定より10年以上、長生きしてくれた。それはよかったな、って思います。」(娘さん)



晩年にお酒とゆったり過ごした場所

ユーザーレポート User Report

ゼロ
0の証明

個人

「あれ、よかったよね」 母と娘が繰り返す言葉

お父様が旅立たれてまだ間もない今も、お母様は折に触れてその言葉を口にするとおっしゃいます。

「車の話になるたびに、母が言うんです。『あれよかったよね』って。もう口癖みたいに。安心感が半端なかった、って。私も同じ気持ちです。」(娘さん)

娘さんは、インターロックを取り付けるまでに警察にも病院にも断られました。詐欺かもしれないと思いながら、勇気を振り絞って連絡しました。それでも動いたのは、「このまま何もしなければ、絶対に後悔する」という確信があったからです。

「つけてからの3年半は、本当に気持ちが安らぎました。感謝してもきれないくらい。一番の心配が消えたから、あとは体のことだけ心配でした。父が最後にビールを飲みながら逝けたのも、もしかしたらあれがあったからこそかって、今は思います。」(娘さん)

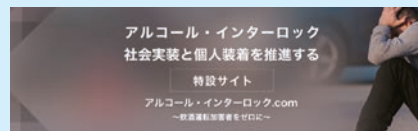
最後に、娘さんはこう言いました。同じように悩んでいるどこかの家族に届いてほしい、と。

「本人はつけたがらないと思います。でも家族が動くしかない。父は飲む前に用事を済ませて、あとはゆっくり家で飲む、という生活リズムに自然と変わっていったんです。飲んだら車が動かない、ということに不満を持つどころか、なんとなく納得してくれてたみたいで。取り付けてすぐに父にうまく説明してくださったおかげだと思っています。車に乗れないから家族もガミガミ言わなくていい。本人も家族も、楽になれる。同じように悩んでいる方に、こういう選択肢があるということを知ってほしい。ただ、それだけです。」(娘さん)

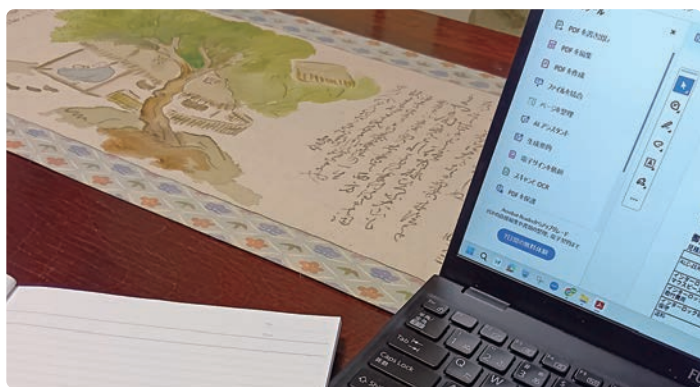


Aさんのご冥福を、心よりお祈り申し上げます。
この記録が、同じ思いで悩む家族のもとへ届きますように。

【編集注】本レポートは、ご遺族からのインタビューをもとに構成しています。個人を特定できる情報は一部変更しています。



東海電子WEBサイト
【アルコール・インターロック.com】
<https://alcohol-interlock.com/>



※文章、写真の無断転載や抜粋、加工は固くお断りいたします。

LINE公式アカウント

大切な人の飲酒運転で悩まれていたら…
いつでもLINEで
ご相談ください!

@700xyfip

